

3. 各学科等の各段階における到達目標

(1) 文学部国文学科（中一種免（国語）・高一種免（国語））

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し、国文学基礎講座、入門演習などの初年時導入教育を始め、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が国文学科の学生としての自覚を持って大学4年間での学習の展望・イメージを抱けるようにする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	基礎演習における発表を通じ、教壇に立ち、人前で発表する訓練を開始するとともに、教育学関係では、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、教員となるための基礎的能力と自覚の向上に努める。国語科教育法1の履修を通じて、専門教育を行うための準備段階に入る。
	後期	前期に引き続き、演習科目でプレゼンテーション能力の更なる向上を目指すとともに、教員としての専門教育を、どの分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、3年次へ繋げていく。自分が教員となることの意義を再度問い、責任を持って教職課程の履修を続けることを再確認させる。国語科教育法2の履修でスキルアップを図る。
3年次	前期	国文学・国語学の専門性を身につけるため2つの異なる分野のゼミに所属し、それぞれの専門領域を明確にする。ゼミにおける発表は、問題点の発見、資料調査、選択・統合、発表と、すべてが教材研究と授業へ繋がるものと位置づけている。高一種免（国語）取得希望者は、国語科教育法3を履修し、国語教諭としての更なる資質向上を目指す。
	後期	自分の専門領域（卒業論文の研究分野）を決定し、国語教員としての専門性をどこに置くかを考える。教育実習での授業運営に必要な、国語の専門性を十分身につけられているか、ゼミでの調査・発表を通じて確認させる。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、国文学・国語学の研究を進め、国文学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(2) 文学部英文学科 (中一種免 (英語)・高一種免 (英語))

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	「教育原論」などを通して教職に関する基礎知識を修得する。また、英文学科の学生として4年間学修していく上で必要な英語力と、英語圏の文化や文学についての幅広い知識を身に付けることを目指す。その過程で、他者（異文化を含む）との相互理解に努めようとする寛容な態度を培っていく。
	後期	「教職論」などを通して教師の役割を理解し、教職を目指すことの意義を考える一方で、理想とする教師像を作り上げていく。また、スキル科目の履修によってより実践的な英語力を身に付け、英語という言語や英語圏の文化・文学にも習熟し、対象を正確に理解し表現する態度と能力を養う。
2 年次	前期	教職面談を実施し、英語力と教科・教職に関する基礎知識の確認を行った上で、「教職カルテ」を作成している。「英語科教育法1」の履修により英語教育に関する基礎知識を修得し、日々行われている授業実践の理論的背景を理解する。さらに高度な英語力を身に付け、グローバルな視点の涵養を目指す。
	後期	「英語科教育法2」を履修し、学習指導案の作成や模擬授業を通して英語科における授業実践の在り方を理解する。可能な限りスクールボランティアに参加し、学校現場を体験する。また、英語圏への半期留学が可能な場合、英語力を飛躍的に伸ばすよう努めるとともに、実体験を通して異文化に対する理解を深めていく。
3 年次	前期	教職面談を実施し、英語力と教科・教職に関する専門知識の確認を行った上で、「教職カルテ」を作成している。「英語科教育法3」の履修により高等学校における英語教育の在り方を、「児童英語教育 I」により英語科における小中連携について理解する。また、「専門演習」を通して、自ら主体的に課題を発見し、調査・分析する力を養う。
	後期	教師塾やスクールボランティアへ参加している学生は、教育の理論と実践の関係をさらに深く考察できるように努める。「専門演習」をはじめとする多様な科目の履修によって英語力を高めながら、言語・文化・文学などの専門研究に取り組み、主体的で批判的・合理的な思考を展開できることを目指す。
4 年次	前期	教職面談を実施し、教職に就く意志の確認を行った上で、「教職カルテ」を作成している。「教育実習」を通して、学校の仕組みや生徒の実態を体験的に理解する。また、「卒業研究演習」などを履修し、言語・文化・文学に関する幅広い知識を動員し、実証的かつ論理的に研究を進める力を涵養する。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(3) 文学部史学科 (中一種免 (社会)・高一種免 (地理歴史))

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎能力、及び歴史学を学ぶことの意義、歴史研究の方法を学ぶための基本的知識の修得を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、教職を目指すすべての学生が、歴史学を学び教育に活かすための自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	歴史学を学ぶことの意義、歴史研究の方法を学ぶための基本的技術の修得を目指し、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2 年次	前期	史料講読・入門演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶための基本的技術の修得に加え、日本史・東洋史・西洋史の専門領域に関する専門知識を修得して教科内容に関する知識を深め、教職課程科目では、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	教科内容に関する知識を深め、史料講読・入門演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶための基本的技術の修得に加え、日本史・東洋史・西洋史の専門領域に関する専門知識を深め、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行うとともに、歴史研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、自らの進路の方向性を決定することを目標とする。
3 年次	前期	史料講読・演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶためのより高度な知識・技術の修得に加え、日本史・東洋史・西洋史の専門領域に関する専門知識を深め、教科教育における知識を深め、教職課程科目では、教科教育に関する教育方法論を学び、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	史料講読・演習・特殊講義を通じて、歴史研究の方法を学ぶためのより高度な知識・技術を修得し、卒業論文作成に向けて各自のテーマを設定し、自身のテーマ領域に関する専門知識を深めるとともに、教科教育における知識を深める。また、教職課程科目を通じて、教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指す。
4 年次	前期	自身の研究テーマに即した専門知識を深め、卒論作成に向けて史料収集・調査分析を進め、教科教育における知識を深める。協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと 4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(4) 発達教育学部教育学科教育学専攻

◇幼一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が教育学専攻の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	教育学研究に繋げる基礎的な教育学演習を始めるとともに、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	教育学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行い、自らの進路の方向性を決定すること(3回生からのゼミを決定する)を目標とする。
3年次	前期	教育学研究を進めるためのゼミに所属し、それぞれの専攻領域を明確にするとともに、附属小学校(幼稚園教員免許のみ志望者を除く)での教育実習を行うことによってそれまでの教育理論の実践化を具体的に体験する。附属小学校における教育実習によって、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	教育実習を体験することによって、教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、教育学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、教育学研究を進め、教育学専攻学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習(2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件)の履修により、本専攻の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(4) 発達教育学部教育学科教育学専攻

◇小一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が教育学専攻の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	教育学研究に繋げる基礎的な教育学演習を始めるとともに、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	教育学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行い、進路の方向性を決定すること(3回生からのゼミを決定する)を目標とする。
3年次	前期	教育学研究を進めるためのゼミに所属し、それぞれの専攻領域を明確にするとともに、附属小学校での教育実習を行うことによってそれまでの教育理論の実践化を具体的に体験する。附属小学校における教育実習によって、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	教育実習を体験することによって、教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、教育学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、教育学研究を進め、教育学専攻学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習(2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件)の履修により、本専攻の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(5) 発達教育学部教育学科音楽教育学専攻（中一種免（音楽）・高一種免（音楽））

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学で学ぶことの意味を理解し、音楽の表現や理解のための基礎知識や技術を身につける。また授業を通じてクラスなどさまざまな単位のコミュニティを主体的に形成していく一員という意識を持つ。それとともに教職科目を修得して、教職と自己の適性について考える。
	後期	音楽の理論と歴史に関する基礎知識や、ピアノと声楽の基礎的技術を身につける。教職論を学び、教師としての責任や、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係を考え、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	各種のより専門的内容の授業を受け、音楽の基礎的な知識や技術を確かなものにする。発表・レポート・演奏などを通して、統合的な理解力や表現力を培うとともに、現在の学校や生徒の状況について理解することを目標とする。
	後期	前期の学びに加えて、「音楽科教育法」で音楽の指導法の学びを開始し、音楽や音楽教育に関する知識や技術を高めていく。教職に関する科目群を修得し、より深く学校あるいは生徒について理解する。
3年次	前期	音楽についてのより深く多様な科目を修得するとともに、音楽教育に関する科目の内容を理解し身につける。また自らの適性や志向を正確に把握して、後期から始まるゼミを選択する。さらに、これまでに学んだ知識に関する到達度テストを受け、自らの弱点を知り補う努力をする。
	後期	前期に引き続き、音楽や音楽教育に関する科目の内容を身につけるとともに、ゼミに所属して自己にふさわしいテーマを設定して研究を進める。また生徒指導の諸問題を理解し、次年度に行う教育実習への準備をする。
4年次	前期	ゼミで専門的に研究する一方、教育実習を行い、それによって授業はもとより生徒指導など、学校現場での経験から多くを学び、教師に求められる能力や心構えを明確に意識する。また音楽教育の前提となる音楽の表現力や理解力をいっそう高めることを目標とする。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本専攻の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(6) 発達教育学部児童学科（幼一種免）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	大学生としての基礎的能力を身に付けるとともに、幼稚園教諭を目指すために必要な基礎知識と基本的スキルの習得を目指す。また、次年度以降に開講予定の学外実習に向けての期待とモチベーションを高め、児童学科の学生として求められる基礎知識の確実な習得を目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義を再確認しつつ、教師（保育者）としての責任の自覚を促すとともに、「教育・保育」に関する基礎理念を身に付け、次年度の学外実習への具体的目標を掲げ、自らの課題を達成するために必要なスキルを磨くことを目標とする。
2 年次	前期	児童学科の4領域（児童発達・児童保健・児童文化・児童表現）の基礎的な学習を通じて、保育および幼児教育についての専門的知識を深めつつ、夏季休暇中に実施予定の保育実習を通して乳幼児の実態に触れ、今後の幼稚園実習・施設実習へ向かうにあたって自らの課題を確認することを目標とする。
	後期	前期に引き続き、児童学科の4領域（児童発達・児童保健・児童文化・児童表現）の基礎的な学習を通じて、保育および幼児教育についての専門的知識を深めつつ、教育実習論の受講を通して幼稚園教諭を目指す自己を再確認する。また、次年度以降履修するゼミの決定を通して、自らの進むべき方向を決定することを目標とする。
3 年次	前期	児童学科の4領域より自ら選択したゼミに所属し、それぞれの専門的学びの方向性を明確にするとともに、指定幼稚園での教育実習を行うことを通して、これまで学んできた理論を検証する。また各自が身に付けてきたスキルの実践を通して、次年度に実施される最後の教育実習に向けての自らの課題を再確認することを目標とする。
	後期	前期に体験した指定幼稚園における教育実習を振り返り、教育・保育に関わる理論を再確認するとともに、今後の学外実習において必要とされる教育・保育現場におけるスキルと実践力をいかにして獲得すればよいのか、またそのために自ら何に取り組むべきかを考え、実行に移すことを目標とする。
4 年次	前期	自己開拓幼稚園（協力実習園）における教育実習を行うとともに、教員（または保育士）採用試験の受験を通して幼稚園教諭（保育者）になることを自覚するとともに、児童学の4領域より自ら設定したテーマに基づいた卒業研究を進め、児童学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	保育・教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。保育・教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(7) 家政学部食物栄養学科

◇栄養一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指して組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が食物栄養学科の学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	食物栄養学及び教育学研究に繋げる基礎的な演習を始めるとともに、学校教育や学校食育についての基礎的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	食物栄養学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、食の専門家及び教諭である栄養教諭を目指すことの再確認を行う。また、学科の食物栄養学の専門教科と、栄養教諭の教科、附属小学校における食育活動を通じて、専門と実践力を身につけさせることを目標とする。
3年次	前期	食物栄養学のより専門性の高い、講義や実験実習を通し、また、スクールボランティアや附属小学校における食育活動を通じて、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	管理栄養士課程の学外実習や臨地実習を体験することによって、食物栄養学の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、ゼミに配属されることにより、食物栄養学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4年次	前期	協力実習校（または、教育委員会指定の栄養教諭配属校）における栄養教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、食物栄養学研究を進め、食物栄養学科の学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（栄養教諭）（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習（栄養教諭）においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(7) 家政学部食物栄養学科

◇中一種免(家庭)・高一種免(家庭)

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が食物栄養学科の学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	食物栄養学及び教育学研究に繋げる基礎的な演習を始めるとともに、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	食物栄養学研究及び教育学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行い、進路の方向性を決定することを目標とする。
3年次	前期	食物栄養学のより専門性の高い、講義や実験実習を通し、また、スクールボランティアや附属小学校における食育活動等を通じて、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	管理栄養士課程の学外実習や臨地実習を体験することによって、食物栄養学の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識する。家庭科教諭としての資質向上のために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、ゼミに配属されることにより、食物栄養学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、食物栄養学研究を進め、食物栄養学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習(2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件)の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(7) 家政学部食物栄養学科

◇中一種免（保健）・高一種免（保健）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が食物栄養学科の学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	食物栄養学及び教育学研究に繋げる基礎的な演習を始めるとともに、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	食物栄養学研究及び教育学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行い、進路の方向性を決定することを目標とする。
3年次	前期	食物栄養学のより専門性の高い講義や実験実習、特に臨床栄養、学校保健に関する講義・実習を通し、また、スクールボランティアや附属小学校における食育活動を通じて、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	管理栄養士課程の学外実習や臨地実習を体験することによって、食物栄養学の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識する。教諭としての資質向上のために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、ゼミに配属されることにより、食物栄養学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を通して、保健教諭の資質向上に努めるとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、食物栄養学研究を進め、食物栄養学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(8) 家政学部生活造形学科（中一種免（家庭）・高一種免（家庭））

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、学生が教職課程の学生としての自覚と誇りを持てることを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	教育課程論や家庭科教育法などの専門的講義を受講することによって、学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	家庭科教員としての専門的知識や技術を身につけ、生活造形学研究をいかなる分野において深めていくかを自らの興味関心・適性を考慮し主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行い、進路の方向性を決定することを目標とする。
3年次	前期	家庭科教員としての専門的知識や技術の向上をめざして、生活造形学専門演習のゼミ所属に向けて、それぞれの専門領域を明確にするとともに、教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、生活造形学専門演習を行ない、家庭科の教員としての専門性の確立に向け卒業研究につなげることを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、卒業研究を進め、生活造形学科学生として、また家庭科の教職を目指すものとしての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(9) 家政学生生活福祉学科

◇中一種免(家庭)・高一種免(家庭)

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が生活福祉学科の学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	教職を目指すことの意義、教師としての責任、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	家政学研究に繋げる基礎的な演習を始めるとともに、学校教育や教育学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生の基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	家政学研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、教育専門家である教師を目指すことの再確認を行う。また3回生からのゼミを決定し、進路の方向性を決定することを目標とする。
3年次	前期	家政学研究を進めるためのゼミに所属し、それぞれの専攻領域を明確にする。また、2回生にひきつづき教育学に関わる専門的講義を受講することにより、その後の教職を目指すことの是非を自ら再確認することを目標とする。
	後期	教育実習の準備を通して教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識する。スクールボランティアや教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、家政学研究のためのテーマの絞り込みを行うことを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行い、実践の中で「教師になるため」の自覚の確認を行う。さらに、家政学研究を進め、生活福祉学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習(2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件)の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(9) 家政学生生活福祉学科

◇高一種免（福祉）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が生活福祉学科の学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	生活を基盤とした福祉や介護、医療についての知識や技術を学ぶとともに、教職を目指すことの意義、教師としての職務、「教える」ことと「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。また、介護実習を体験することにより、高齢者および障害者への援助方法を学ぶ。
2年次	前期	専門的講義や演習を受講することにより、基礎学力の向上に努め、教育理論を身につける。また、コミュニケーション能力を高め、他者との相互理解や協働する大切さを学ぶ。さらに、スクールボランティア等に参加し、学校教育現場を体験し、教員としての資質や能力を磨いていく。
	後期	家庭や学校、地域等の社会における諸問題を整理し、それらの問題が発生している原因や根拠を考えていく。さらに、グローバルな視点を養い、幅広い知識や技術を習得する。教師を目指すことの意義と意欲を再確認し、自らの進路の方向性を決定すること(3回生からのゼミを決定する)を目標とする。
3年次	前期	現代社会で発生している問題を把握し、諸問題に対する援助方法を学ぶ。福祉の諸問題に対しては、政治経済、地域や家族、対人援助方法など、多角的視点からのアプローチを習得する。卒業研究を進めるためのゼミに所属し、それぞれの研究領域を明確にする。
	後期	教育に関する理論と実践を組み合わせる力を養い、応用力を高めていく。これまでの専門的知識を基盤にして教師塾等へ参加し、教員の資質や実践力を身につけていく。卒業研究のためのテーマを絞り込み、計画的な研究活動を進めることを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行い、指導計画の作成および実践を通じ、生徒への教育方法を学ぶ。教員採用試験を受験し、「高等学校教諭（福祉科）になるため」の自覚の確認を行う。さらに、卒業研究を進め、生活福祉学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(9) 家政学生生活福祉学科

◇養護教諭一種免

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	大学生としての基礎能力及び教員を目指すための基本的資質の育成を目指し組織されたカリキュラムから、演習、講義等幅広く学習することによって、すべての学生が生活福祉学科の学生としての自覚と誇りを持つことを目標とする。
	後期	生活を基盤とした福祉や介護、医療についての知識や技術を学ぶとともに、教職を目指すことの意義、養護教諭としての職務、「教える」と「学ぶこと」の基本的関係等、教育学の基礎理念を身に付け、自らの進むべき方向性を徐々に確立していくことを目標とする。
2年次	前期	学校保健や看護学、医学についての専門的講義を受講することによって、すべての学生が基礎的能力の向上に努める。さらに、余裕があれば、スクールボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を行うことを目標とする。
	後期	多くの講義・演習を通して、福祉や介護・教育分野における諸問題の存在を理解する。卒業研究をいかなる分野において深めていくかを自ら主体的に判断し、学校保健・学校看護の専門家である養護教諭を目指すことの再確認を行い、自らの進路の方向性を決定すること(3回生からのゼミを決定する)を目標とする。
3年次	前期	病院での看護臨床実習を行うことによって、それまでに学んだ看護の実践を体験する。家庭・学校・地域で発生する諸問題に対して援助できる専門的な技術を習得し、基礎的理論と学校現場における応用技術とを想定した実践的な学習経験を積み重ねる。卒業研究を進めるためのゼミに所属し、それぞれの研究領域を明確にする。
	後期	教育の理論と実践の関係を自らの生活に取り入れることの必要性を認識し、それを実現するために、スクールボランティアから教師塾へと教育実践のレベルアップを目指すこと、さらに、卒業研究のためのテーマの絞り込みを行い、計画的な研究活動を進めることを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行うとともに、教員採用試験を受験することによって、「養護教諭になるため」の自覚の確認を行う。さらに、卒業研究を進め、生活福祉学科学生としての専門性の確立を目指す。
	後期	教職実践演習(養護教諭)(2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件)の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習(養護教諭)においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(10) 現代社会学部現代社会学科

◇中一種免（社会）・高一種免（公民）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	自らが大学入学前に持っていた教員志望の意志の確認および適性の吟味の機会となる時期である。教職課程のカリキュラムの内容とその修得の意義を確認したうえで、教職及び教科に関する科目を実際に受講し始めることによって、その基礎知識を習得し、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	認定課程の教科に関する科目をいくつか履修することにより、目指す課程の基礎知識・能力を身につけると同時に、自らの教員としての適性を自己吟味する。教職課程履修記録を作成し、教職課程担当教員との個別面接の場を設け、今後も継続して真剣に教職課程を履修する意志を確認することを目標とする。
2年次	前期	教職に関する科目については主に中学社会に関する科目を履修し、その基礎能力の強化に努める。教科に関する科目については、現代社会学科の主要カリキュラムを構成する専門科目の履修が始まる時期であり、複数の教職課程科目を履修するなかで、実際に担当する教科の教員を目指す自己の姿勢を明確にすることを目標とする。
	後期	教職に関する科目、教科に関する科目ともに、本格的なカリキュラム履修が続く時期であり、教員としての自己の適性を吟味することが求められる。年度末には、教職課程担当教員との履修面接を行い、教職課程履修継続についての自らの意志を確認し、それに基づく教職への主体的取り組みができていないことを目標とする。
3年次	前期	教科に関する科目については、現代社会学科の教育課程と並行して受講できる科目を履修する。4年次の教育実習のために、教育実習校確保の手続きを行う。中学社会を志望する学生は介護等体験に参加する。この段階で、中学社会、高校公民のいずれを（あるいは両方）を取得するかを決定できていることを目標とする。
	後期	教職に関する科目については「教育実習論」を履修し、教科に関する科目についても大部分の履修を終える。スクール・ボランティア等についても、自主的に参加することを求める。教職課程担当教員による履修面接を経た時点では、教育実習、教員採用試験受験という具体的進路を目指す決意が固まっていることを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を実施し、教育現場における具体的教職体験を通して教員志望者としての自覚を深める。教育実習終了後、教職課程担当教員との履修面接を行い、自らの意志と適性について最終確認をする。教育専門職としての教員を多面的に理解し、教育現場で働く心構えができていないことを目標とする。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(10) 現代社会学部現代社会学科

◇高一種免（情報）

履修年次		到達目標
年次	時期	
1 年次	前期	自らが大学入学前に持っていた教員志望の意志の確認および適性の吟味の機会となる時期である。教職課程のカリキュラムの内容とその修得の意義を確認したうえで、教職及び教科に関する科目を実際に受講し始めることによって、その基礎知識を習得し、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	教科に関する科目としてコンピュータ及び情報処理関連科目を履修し、アルゴリズムとプログラミングに関する基礎知識の習得と同時に、自らの教員としての適性を自己吟味する。教職課程履修記録を作成し、教職課程担当教員との個別面接の場を設け、今後も継続して真剣に教職課程を履修する意志を確認することを目標とする。
2 年次	前期	現代社会学科の主要カリキュラムを構成する専門科目の履修が開始される。情報分野に関する科目を履修し、情報ネットワークとマルチメディア表現に関する基礎知識を習得する。また、教職に関する科目の履修により、情報科の教育目標や指導内容を理解し、教員を目指す自己の姿勢を明確にすることを目標とする。
	後期	学科専門科目から情報分野を中心に履修し、情報システムに情報倫理についての理解を深め、教員としての自己の適性を吟味することが求められる。年度末には、教職課程担当教員との履修面接を行い、教科課程履修継続についての自らの意志を確認し、それに基づく教職への主体的取り組みができていることを目標とする。
3 年次	前期	教職に関する科目としては、生徒指導や教育行政に関する知識を習得する。教科に関する科目は学科専門科目と並行して履修し、情報セキュリティやデータベースを含んだ幅広い知識の習得を目指す。また、4 年次の教育実習のため、実習校確保の手続きを行う。
	後期	教職に関する科目については「教育実習論」を履修し、教科に関する科目についても大部分の履修を終える。スクール・ボランティア等についても、自主的に参加することを求める。教職課程担当教員による履修面接を経た時点では、教育実習、教員採用試験受験という具体的進路を目指す決意が固まっていることを目標とする。
4 年次	前期	協力実習校における教育実習を実施し、教育現場における具体的教職体験を通して教員志望者としての自覚を深める。教育実習終了後、教職課程担当教員との履修面接を行い、自らの意志と適性について最終確認をする。教育専門職としての教員を多面的に理解し、教育現場で働く心構えができていることを目標とする。
	後期	教職実践演習（2 回生～4 回生の各年度の初めと4 回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。

(11) 法学部法学科 (中一種免 (社会)・高一種免 (公民))

履修年次		到達目標
年次	時期	
1年次	前期	教職課程履修の意義を理解し、教職に関する科目及び教科に関する科目を実際に受講することによってその基礎知識を習得すると同時に、教職を志す意識を確立することを目標とする。
	後期	前期に引き続き、開講される教科に関する科目・教職科目を履修し、目指す課程の基礎知識・能力を身につけると同時に、自らの教職志望に関する適性を吟味し、教職課程を履修する意思を確認することを目標とする。
2年次	前期	さらに専門的な教職科目を履修し、基礎的能力の向上に努めるとともに、余裕があれば、スクール・ボランティア等に参加することによって、学校教育現場を知るための体験を積むことを目標とする。
	後期	前期に引き続き、専門的な教職科目を履修し、今後の教職課程履修継続についての意思を再確認する。中学校社会科志望の学生には、介護等体験についてのオリエンテーションを行い、実習内容や申し込み手続きについて説明する。今期は、自らの適性を確認し、それに基づく教職課程履修への主体的取り組みができていることを目標とする。
3年次	前期	4年次の教育実習を踏まえ、教育実習校確保の手続きを行う。なお、中学社会を志望する学生は介護等体験を履修する。この段階で中学社会、高校公民のいずれを（あるいは両方）を取得するかを決定できていることを目標とする。
	後期	「教育実習論」を履修し、4年次に実施される教育実習に備える。教科に関する科目についても、大部分の履修を終えることが求められる。多様な教育現場を体験するため、スクール・ボランティア等への参加を促す。教育実習という、教員への道を進むための具体的ステップを踏む決意ができていることを目標とする。
4年次	前期	協力実習校における教育実習を行い、教育現場における具体的教職体験を積む。教育専門職である教師の役割を多面的に理解し、教育現場に進む心構えができていることを目標とする。
	後期	教職実践演習（2回生～4回生の各年度の初めと4回生後期の初めに実施される教職面談をすべて受け、教職カルテを作成していることが履修の必須要件）の履修により、本学科の教職課程を修了する。教職実践演習においては、教師としての専門性が一定レベルに到達しているかチェックし、教師に向けた自己の確立を目標とする。この教職実践演習により、教職課程履修者の教員資質を保証する。